

通級による指導の充実に関する研究

—学年体制を生かした情報交換会を通して—

知多市立八幡中学校 橋本 良太

1 実践

(1) 年間スケジュールについて

本研究に当たり愛知県総合教育センターから示された年間スケジュールモデルを基に、中学校現場に無理のない計画を模索した。知多市では「成長ファイル」（資料1）と呼ばれる、子どもの成長過程で受けた支援の状況記録、個別の支援を要するため関係機関で作成した「個別の支援計画」などをはさみ、成長過程における支援情報を継続的につなげていくためのつづりを生徒一人一人が所持している。通級指導教室が設置される以前より生活習慣や学習に不安を抱える生徒を対象に成長ファイルを活用し、保護者と協力して個別の支援計画を立てていた。そこで、本研究に当たり、年間スケジュールを「成長ファイル」に関連付け、「成長ファイル年間計画」（資料2）を作成した。また、中学校の教科担任制という特性を踏まえ、通常の学級担任のみの情報交換ではなく、対象学年全体での情報共有の在り方について模索した。

【資料1 成長ファイル】



【資料2 成長ファイル年間計画】

成長ファイル 年間計画

月	項目	備考	担当
1月	成長ファイル作成	1学年主任（10月）・通級指導教室（10月） ①-1 成長ファイル作成（10月） ①-2 成長ファイル作成（10月）	1
2月	保護者と連絡	① 連絡票を送付する。 ② 連絡票の返信を待つ。 ③ 連絡票の返信を待つ。 ④ 連絡票の返信を待つ。	2
3月	学年主任と支援計画を作成	・「個別の支援計画」を参考に、対象生徒に ・支援計画を立てる。 ・支援計画（1）～（3）を作成（10月） ・作成した支援計画の内容を保護者に送付 ・1学年主任は保護者と一緒に「個別の支援計画」を作成する。	3
4月	校内教育支援委員会開催	・11月保護者の確認 ・連絡票の返信 ・12月1日までに、連絡票の返信を待つ。	4
5月	保護者と連絡	・連絡票の返信を待つ（1）～（3）を作成（10月） ・作成した支援計画の内容を保護者に送付 ・1学年主任は保護者と一緒に「個別の支援計画」を作成する。	5
6月	保護者と連絡	・連絡票の返信を待つ（1）～（3）を作成（10月） ・作成した支援計画の内容を保護者に送付 ・1学年主任は保護者と一緒に「個別の支援計画」を作成する。	6
7月	保護者と連絡	・連絡票の返信を待つ（1）～（3）を作成（10月） ・作成した支援計画の内容を保護者に送付 ・1学年主任は保護者と一緒に「個別の支援計画」を作成する。	7

通級指導者と通常の学級担任との情報交換会 予定表

1月	校内教育支援委員会に決定。支援計画を作成する。
2月	1学年主任の指示を受けて情報交換。支援計画の作成。
3月	2学年主任の指示を受けて情報交換。支援計画の作成。
4月	3月保護者の確認を受け、1学年主任の指示を受けて。

(2) 情報交換マニュアル（連絡票）の活用と工夫 ア 3年間継続して活用できる工夫

連絡票を3年間継続して活用できるように、対象生徒の連絡票（エクセルファイル）にエクセルシートを1年単位で3枚整備した（資料3）。そうすることで、進級時にこれまでの目標や支援、成長について容易に把握でき、継続した支援につながるようにした。

イ 連絡票入力の手順

関係教師に情報交換会の日程を1か月前に予告し、連絡票への入力を依頼した。通常の学級担任は事前に保護者と作成した「成長ファイル」を基に、各項目150字以内に要約して簡潔に情報を入力した。年度当初など、生徒の様子を十分に把握できず、記述することが難しい場合は空欄のままでよいことを伝えた。空欄については学年主任も参加する情報交換会で一緒に考えていく旨を伝え、通常の学級担任一人で抱え込まないように配慮した。通級による指導担当者は「成長ファイル」の個別の達成目標

を基に対象生徒に聴き取りを行い、通常の学級で生かせる支援の工夫について入力した。

ウ メモ欄の追加

連絡票の右端に「メモ欄」(資料4)のセルを追加した。情報交換会で話し合った内容を項目ごとに整理して記入できるようにした。

エ 議事録の工夫

情報交換の内容を「メモ欄」にパソコンで入力した。情報交換会中はパソコンで入力中の画面を電子黒板に投影し、支援の方法に認識のずれが生じないようにその場で逐一確認できるようにした。

オ 会議に参加していない教師への周知

情報交換後、欠席した教師や、管理職へは情報交換会中に「メモ欄」に入力済みの連絡票を回覧した。具体的な支援や情報交換会での声を関係教師に周知を図った。

(3) 情報交換会の様子

ア 第1回情報交換会の様子

(7) 実施方法

通級による指導を利用している生徒を対象に、6月上旬に第1回情報交換会を行った。情報交換会に向けて、通常の学級担任は成長ファイルについて対象生徒の保護者と面談を行った内容を基に連絡票に必要な項目を入力した。

情報交換会には、通級による指導担当者、通常の学級担任、学年主任、特別支援教育コーディネーターが出席した。第1回情報交換会の進行(対象生徒1人につき10分以内を目標)については以下のとおりである。

- | | |
|--------------|----------------------------------|
| ① 通常の学級担任 | : 連絡票に従い、生徒、保護者のニーズについて報告 |
| ② 通級による指導担当者 | : 対象生徒が困っていることの背景の説明 |
| ③ 通常の学級担任 | : 通常の学級における現在の配慮事項 |
| ④ 通級による指導担当者 | : 通級での重点目標、活動の様子を報告、学級での支援提案 |
| ⑤ 話し合い | : 生徒の実態に合わせ通常の学級で支援できることを具体的に考える |
| ⑥ 学年主任 | : 学年間で共通理解することを確認 |

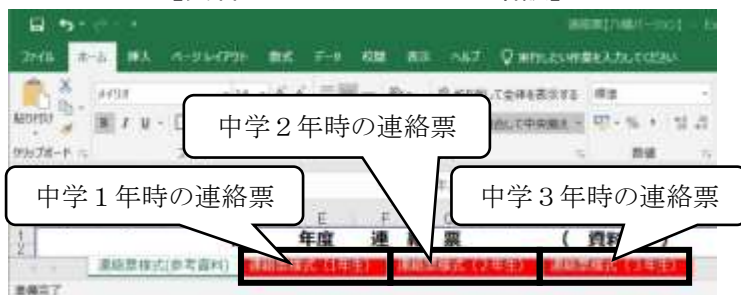
(イ) 工夫したこと

成長ファイルから連絡票に転記する内容を精選し、伝えたいことを簡潔に表現した。簡潔にまとめることで、生徒一人一人の目標が明確になり、支援の方法についても的確な意見が出ることを狙った。また、1回の情報交換会につき対象生徒3名以内、生徒1人につき10分以内を目安に会をもつことで、情報交換会に対する負担の軽減を目指した。さらに、通常の学級担任だけでなく、学年主任も出席することで、学級担任が一人で抱え込んでしまう負担を軽減し、クラス、教科を超えて支援の輪を広げた。

(ウ) 情報交換会を終えて

情報交換会までも空き時間を使って日常的に、通級による指導担当者と通常の学級担任で生徒の様子について情報交換を行っていたため、対象生徒一人一人の実態を出席者が把握できていた。そのため、背景を詳細に説明する必要なく本題に入れたので、短時間で会をもつことができた。また、連絡票が端

【資料3 エクセルシート増設】



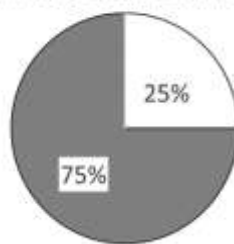
【資料4 メモ欄の追加】



的に示されていたことにより、生徒の様子が浮き彫りになり、必要な支援について共通理解を図ることができた。情報交換後、通常の学級担任は、自分の役割が明確になり、積極的に行動に移すことができるようになったと支援に自信がついた様子だった（資料5）。学年主任も参加していたため、週に一度開かれている学年会で情報交換会の内容に触れてもらい、学年間での共通理解を図ることができた。連絡票を活用し、口頭でなく文字で確認することで、互いの考え方の相違をすり合わせることもできた。

【資料5 第1回情報交換会を終えて】

情報交換会を通して、対象生徒への関わり方に変化はありましたか



- 適切な関わり方がわかり、積極的に行動に移すことができた
- 適切な関わり方がわかり、行動に移すことができた
- 適切な関わり方は分かったが、行動に移すことは難しかった
- 関わり方に変化はなかった

イ 第2回情報交換会

(7) 実施方法

第1回情報交換会で話し合った内容を基に1学期に行った支援、成果、課題について連絡票にまとめた。情報交換会は教師が参加しやすい夏季休業中に開いた。情報交換会には、第1回と同様、通級による指導担当者、通常の学級担任、学年主任、特別支援教育コーディネーターが出席した。第2回情報交換会の進行（通級利用生徒1人につき10分以内を目標）については以下のとおりである。

- | | |
|--------------|---|
| ① 通級による指導担当者 | : 1学期の通級指導教室での「生徒の様子（目標に対する評価）」 |
| ② 通常の学級担任 | : 「通常の学級における配慮及び変容」
* 学級で担任としてどのような取組をし、生徒がどのように変容したか
* 学年での取組や変容については、学年主任が気付いた範囲で説明 |
| ③ 通級による指導担当者 | : 「2学期の通級による指導についての指導内容や手だて」 |
| ④ 話し合い | : 通級指導教室での取組が通常の学級でどのように生きたか、取組は適切だったのかについて検討
2学期からの支援について話し合い |
| ⑤ 学年主任 | : 学年間で共通理解することを確認 |

(4) 工夫したこと

第1回情報交換会同様、対象生徒を同学年3名以内に限定して短時間で行った。話し合った内容について項目ごとに分かりやすく記録を取るために連絡票の右側に「メモ欄」を追加した。さらに、連絡票を電子黒板に投影し、話し合いと同時進行で情報交換の内容をパソコンで「メモ欄」に入力しながら進行した（資料6）。情報交換後には「メモ欄」を入力した連絡票を学年主任を通じて学年教師に回覧し考えの相違がないようにした。また、管理職にも回覧し情報交換の内容を周知した。

【資料6 第2回情報交換会】



(9) 情報交換会を終えて

対象生徒それぞれについて明確な支援計画を立てたことで、通常の学級担任、学年教師の生徒に対する関わり、声かけも生徒の成長に向けた具体的なものに変化した。

通級指導教室での活動や、通常の学級担任による支援の情報について教科担任にも伝達したことで、学年教師全員の目で対象生徒が自分の困難に向き合って乗り越えようとしている小さな取組を見守る体制が整った。生徒が何に困っているか把握しているため具体的な声かけができるようになり、支援の

輪が広がった。

ウ 第3回情報交換会

(7) 実施方法

3学期に次年度の引き継ぎを中心に第3回情報交換会を行った(資料7)。中学3年生は3月上旬に卒業式を迎え、必要な生徒は進学先に個別の教育支援計画を提出する必要がある。そこで、開催時期を中学3年生は2月中旬に、1, 2年生に関しては、学級編制前の3月中旬に設けた。進路や、次年度の学級編制に大きく関わってくる情報のため、学年会の項目に「第3回情報交換会」を追加し、関係教師全員で行った。第3回情報交換会の進行(通級利用生徒1人につき10分以内を目標)については以下のとおりである。

【資料7 第3回情報交換会】



- | | |
|--------------|---|
| ① 通級による指導担当者 | : 一年間を通しての通級指導教室での「生徒の様子(目標に対する指導の評価)」 |
| ② 通常の学級担任 | : 「通常の学級における変容・次年度への引き継ぎ」
* 中学3年生は進学先への引き継ぎの有無について確認
* 中学3年生については、①②のみの情報交換 |
| ③ 学年主任 | : 学年での取組に対する生徒の変容 |
| ④ 話し合い | : 次年度の学級編制(交友関係、通常の学級担任等)配慮事項確認 |
| ⑤ 学年主任 | : 学年間で共通理解することを確認 |

(イ) 工夫したこと

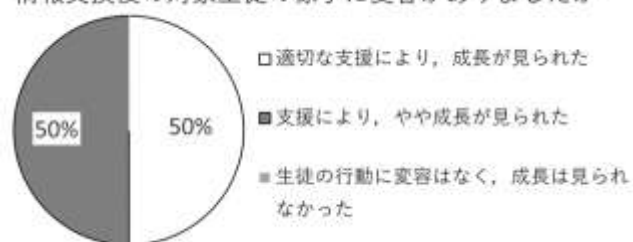
情報交換開催時期に関しては、学年ごとに一年間の流れや、取組が違うので、各学年の時間を取れる時期を考慮した。また、第1回、第2回は、学年主任から学年会で情報を共有する体制をとっていたが、進路や学級編制を考慮し第3回は学年会の中で行った。学年会では、連絡票のほかに、進路先情報や、学級編制資料も準備し、次年度の引継ぎに重点を置いた。

(ウ) 情報交換会を終えて

1年間の情報交換会を通して、生徒が段階的に成長していることを共有することができた。通級による指導担当者は学年主任をはじめ、学年教師の一人として情報交換する場を設けたことで、通級による指導を利用している生徒の普段の教室や授業での様子や、今の中学生の実態について直接意見を交わすことができた。そうすることで、対象生徒がどこまで社会性を身に付けたらいいのか、学習計画はどの程度支援したらいいのかについて実態に即して立案することができるようになりその結果、通級による指導担当者や通常の学級担任だけでなく、多くの学年教師も確かな成長を感じることができた(資料8)。

【資料8 第3回情報交換会を終えて】

情報交換後の対象生徒の様子に変容がありましたか



開催時期を流動的に変えたことで学年教師の負担軽減、必要なときに必要な情報を伝え合うという適切な情報交換会を開催することができた。さらに、学年会の中で開催したことにより、情報伝達に認識のずれが生じることなく正確な情報を共有することができた。しかし、第1回、第2回と対象生徒3名に限定して行ってきたため、30分程度で終わっていたが、各学年6名程度となり、1時間程度時間がか

かってしまった。進路や学級編制に大きく関わる大切な情報なため、負担とを感じる教師は少なかったが、今後は、更に伝達情報を精選して行う必要がある。

エ 第4回情報交換会（令和4年度 第1回情報交換会）

（7）実施方法

新年度が始まり、4月中に通級指導教室利用予定生徒の保護者と通常の学級担任が連絡を取り、個別の指導計画についての懇談会を行った。それを受けて、5月に学年会の中で第1回情報交換会を行った。情報交換会には、通級による指導担当者、学年教師、特別支援教育コーディネーターが参加した。会の進行は、前出の第1回情報交換会のとおりである。

（イ）工夫したこと

前年度の第3回情報交換会を受け、85%以上の教師が、3人ずつ分けて情報交換会をもつよりも、「多少時間がかかっても学年会で一度に行う方が、学年教師全員に意図が伝わり、情報を正しく伝わる」と回答したため、今年度は学年会で情報交換会を行うことにした。本校は毎週月曜日に学年会を開いているため、特別支援教育コーディネーターが各学年主任と通級による指導担当者の予定を確認し、日程を決定した。

新1年生については、入学して間もない生徒についての情報交換となるため、保護者との面談を終え、個別の教育支援計画を作成したが、具体的な支援の方法については、妙案が浮かばず連絡票の記入が進まなかった。そこで、新1年生については、第1回の情報交換会で中学校生活が1か月経過した生徒の実態について通常の学級担任から情報提供をすることにした。その情報を基に、学年全教師、通級による指導担当者、特別支援教育コーディネーターで具体的な支援について一緒に考えた。2、3年生については、保護者との面談内容と過去の連絡票を参考にしながら連絡票を入力した。一人一人の連絡票が1枚のエクセルファイルに1学年ごとにシートで分かれているため、時間をかけずに昨年度からの引き継ぎを行うことができた。

（ウ）情報交換会を終えて

新1年生に関しては、関係教師全員で支援の方法について話し合いながら考えたことにより、通常の学級担任が自信をもって指導できるようになった。また、通級による指導を利用している生徒について学年教師が詳しく知ることにより、入学してすぐに多くの目、手での支援が行き届く体制ができ上がった。さらに、通級による指導を利用していない生徒にも活用できるアイデアをたくさん情報交換できたため、経験年数の少ない教師にとっては大変有意義な時間となった。

また、前年度1年間を通して情報交換会を行ったことで、生徒の特性に合わせた支援方法の事例が少しずつ増えてきた。さらに、「みんなで考えた支援」という意識が高まり、情報交換会の内容を紙面で共有していたころより、自分事として捉えることができるようになってきた。

（4）特別支援学校との連携

今回の研究においては、研究協力校である特別支援学校が定期的に情報交換会に参加した。通級による指導の授業を参観し、生徒の様子を踏まえた具体的なアドバイスを受けた

（資料9）。これまで本校教師だけでは、発達特性に合わせた支援の方法についての知識が足りず、ありきたりの連絡票を作成していた。しかし、個の特性や家庭環境など、さまざまな視点からの支援について、毎回事例を交えての説明を受けることにより、通常の学級へ指導をつなげる方法について

【資料9 特別支援学校との連携】



考えを広げることができた。また、そのことは、教師それぞれが自分の担当する学級での他の生徒への指導にも役立てることにもつながった。学校全体として、特別支援教育の視点の重要性を意識するきっかけとなった。

2 実践の成果

(1) 生徒の変容

情報交換会を通して通級指導教室と学級での目標や状況を共有することができ、指導の一貫性を保つことができるようになった。支援内容についても、より本人の状況に合ったものになっていった。そのおかげで、生徒は安心して通級指導教室で身に付けた方法を通常の学級で生かすことができるようになった。

(2) 通級による指導担当者の視点から（通級による指導の担当教師からの感想）

定期的な情報交換会の日程を決めることで、保護者との面談、授業計画、連絡票の作成などについて、計画的に準備をすることができた。

情報交換会では、通常の学級担任、学年主任、特別支援教育コーディネーターと、①伝え合う（情報交換）、②分かり合う（共通理解）、③分かち合う（役割分担）といった協働的連携を図ることができ、授業の反省の紙面だけでは伝わらないニュアンスを伝えることができた。また、通級指導教室の計画を立てるときに迷っている部分については、情報交換会参加者全員で相談して、多くの目でアイデアを出し合うことができ、とても心強かった。

情報交換会後も、通常の学級担任が忙しいときには、学年主任に積極的に相談することができるようになり、素早く生徒の困り感や不安感に対応することができた。教科担任制の中学校では、学年主任の協力を得られたことはとても大きかった。

市内の通級による指導担当者に情報交換会について伝達をしたところ、「そのような会を自校でも行いたい」という声を聞いた。通級による指導担当者は各学校に一人しかいないので相談できる場や時間が少なく一人で抱えてしまう現実がある。本校の体験から、特別支援教育コーディネーターが通常の学級担任との間のパイプ役になることで、より協働的連携を図ることができるという手応えを感じることができた。

(3) 通常の学級担任の視点から（学年教師の感想アンケートからの感想）（資料 10）

情報交換会を学年会で行うことで、短時間で学年教師との連携を図れて助かった。

知多市が活用している成長ファイルと連絡票の内容が連動しているため、作成が容易だった。また、情報交換会で決めた方針に従い、保護者と面談ができるので自信をもって状況や指導内容を説明できた。

また、他クラスの生徒の様子についても把握できた。該当クラスの担任ではないけれども、授業を担当している生徒の特性を知ることができたので、支援に役立てることができた。特別支援教育コーディネーター担当が情報交換の場を設定したり、司会進行をしたりしているおかげで、今までよりも通級による指導担当者と通常の学級担任、学年教師との連携ができるようになった。さらに、電子黒板を活用することで、その場で話し合ったことがすぐ

【資料 10 情報交換会を終えて】

今年度のような通級による指導担当者・学級担任・学年主任・特別支援教育コーディネーターとの情報交換会は必要ですか。



に連絡票に反映されて正しい情報を共有することにつながった。

(4) 特別支援教育コーディネーターの視点から

本研究以前は、該当生徒が通級指導教室を利用した日に通級による指導担当者が通常の学級担任に授業での様子や困り感について口頭と紙面で連絡していたが、利用する生徒の数が增加することで難しい状況もあった。また、通級指導教室での活動について通常の学級に戻ったときに、どのように活用しているかについては、話し合う機会がなく、上手に連携できていない現状に課題を感じていた。今回、情報交換会として正式に「会」をもち、学年主任や特別支援教育コーディネーターも情報交換会に参加することで、通級による指導担当者が伝えたい細かなニュアンスを曖昧にすることなく伝えることができ、通常の学級担任との確かな情報共有に役立てることができた。得られた情報を基に、該当生徒が通常の学級や生活で困っていることについて通級指導教室で支援し、その成果を通常の学級や授業に戻ったときに途切れることなく連続した支援を加速させる流れを作ることができた。その成果は、通級指導教室を利用している生徒の成長につながっていると感じる。

また、情報交換会を通して、教師同士の連携意識の高まりや、そのことによる教師側の安心感にもつながった。例えば、学年会での情報共有したことは、対象生徒だけでなく多くの生徒の情報交換をする機会の増加につながり、学年全体で生徒を見ていくという「支援の輪」の広がりとなった（資料11）。

少経験の担任からは、「情報交換会を行うことで、他の教師から助言をもらうことができよかった」という声も聞くことができた。

実施に際しては、連絡票作成や情報交換会の時間確保など、負担に感じることはあるが、それ以上のリターンがあるので、次年度以降も引き続き情報交換会を継続してほしいという声が多かった。

また、今回の研究を通して多くの教師間で情報共有がされることで、通級指導教室に多くの目が入るようになった。学年の一部、更には学校の一部として活動できるようになったことで、通級指導教室での活動が確実に通常の学級という社会で実践に役立っていることを感じられるようになった。

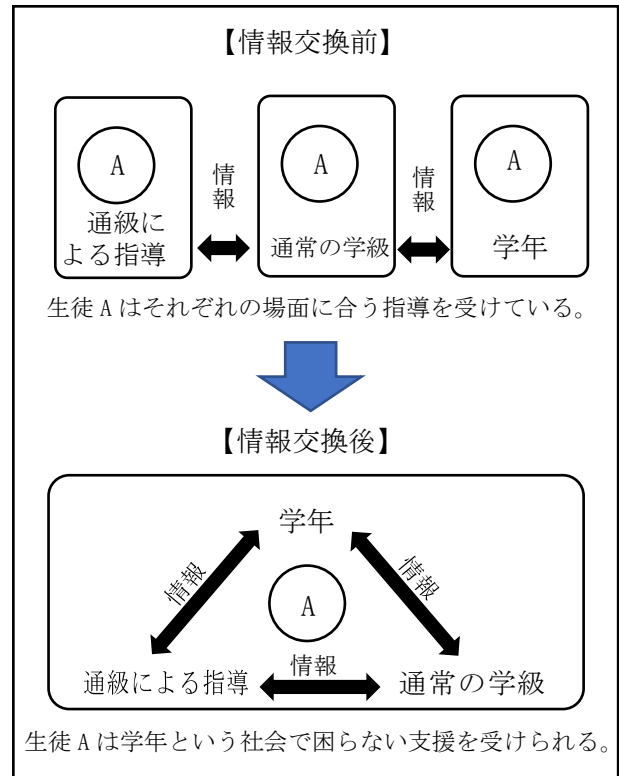
3 課題

(1) 通級による指導担当者の視点から

情報交換会のための連絡票を作成するために、通常の学級担任は個別の教育支援計画から一部を抜粋し、通級による指導担当者は個別の指導計画から一部を抜粋して入力しないとイケない。学級に何人も対象生徒がいる場合、全員分の連絡票を入力することは負担である。情報交換会を行う意義があるので、今後の課題としてより負担の少ない連絡票の形式を考えていく必要性を感じた。

情報交換会後の生徒情報の共有について、各学年主任の考えによるところが大きいため、学校で統一の連絡方法を決めていきたい。そうすることで、教科担任にも正確な情報が伝わり、全校で支援する体

【資料11 指導の変容イメージ】



制が整っていくと考える。

(2) 特別支援教育コーディネーターの視点から

情報交換会によって校内での情報共有の流れが整理され、そのおかげで通級指導教室での活動を通常の学級で生かす流れを構築することができた。次のステップとしては支援の質の向上が課題である。今回の研究では、特別支援学校の教師からの助言があり、そのおかげで支援の質も高まり、それを共有するという流れが効果的だった。今後は、校内の教師の特別支援教育についての専門性向上が必要である。そのためにも、特別支援学校によるセンター的機能を上手く活用しながら特別支援教育についての研修、特別支援学校との連携の継続や支援方法のアーカイブ化などを推進し、一人一人の知識、技能を高めていきたい。

会議時間の短縮や、入力作業の効率化などについては、引き続き検討していく必要がある。負担と成果のバランスを意識しつつ、よりよいものにしていきたい。さらには、学校の事情で担当者交代は避けて通れない大きな課題である。通級による指導担当者、通常の学級担任、学年主任、特別支援教育コーディネーターの誰が転任しても体制を維持できるシステムが必要である。そのためには、できる限りシンプルな体制づくり、さらには、本校だけでなくどの学校へ転任しても通級指導教室と通常の学級は同じように連携できる体制を整えることが必要だと感じた。